

香川県

街道 1

香川の街道遺産の最大の特徴は、江戸期でも重要な2つの信仰の道、“四国遍路”と“金毘羅参詣”の関連遺構がパラレルに存在している点である。他の四国3県には四国遍路はあっても、金毘羅参詣は愛媛に一部見られるに留まる。

遺構の中で、常夜灯は遍路道ではなく、金毘羅道に限定される。その金毘羅常夜灯は、四国の玄関である港と金毘羅宮を結ぶ丸亀道、多度津道、宇多津道、それに、高松と松山を結ぶ東西方向の讃岐街道などの沿道に多数建立された。中でも、丸亀道関連では、金毘羅参詣の拠点として賑わった新堀湛甫(丸亀港)に、高さ7.09mの青銅製の金毘羅常夜灯(丸亀市、天保9(1838))**A**〔左下の写真〕が千人以上の寄進で建立された他、沿道にも与北町の金毘羅常夜灯(善通寺市、文政11(1828))**A**〔下の写真〕などの大型常夜灯が数多く建立された。

街道 2

香川で最も重要な街道遺産である道標は、構成がより複雑なので、①遍路道標、②金毘羅道標の順に解説する。①の遍路道標は、さらに、特定の個人が建立したものと、単発的に寄進・建立されたものに大別できる。前者について見ると、江戸期に遍路道

標を大量に建立した人物は、初期の真念、後期の武田徳右衛門と照蓮の3人で、うち真念建立の道標は、現存37基(徳島12、高知5、愛媛9、香川12)、徳右衛門建立の道標は、現存129基(徳島20、高知28、愛媛67、香川14)である(真念道標は17世紀の道標群という意味でも特異な存在である。照蓮道標については徳島県で紹介する)。

真言宗の僧・真念は、自ら巡礼を重ねる中で遍路道が未整備であることを知り、庶民向けに四国遍路を紹介した『四國邊路道指南』(1687)を出版、八十八箇寺を初めて特定し札所番号を付けたと言われている。武田徳右衛門は愛媛の農民で、家族の不幸が続いたことから一念発起して12年がかりで道標の建てたとされる。香川県には良好な状態に保たれた両者の道標が残っている。代表例は、出作町の真念道標(観音寺市、1680年代?)**A**〔右の写真〕と屋島東町の徳右衛門道標(高松市、寛政12(1800))**C**〔右下の写真〕である。





撮影：馬場俊介（2012.2.19）



撮影：馬場俊介（2012.6.6）



撮影：馬場俊介（2012.2.19）

単発的な遍路道標は 50 基程度とそれほど多くはない。理由は後述するように、札所への距離を示す町石がその代わりを務めているからで、県下の町石は 224 基がリストアップされている。単発の遍路道標で最も立派なものは、高屋町の道標（坂出市、寛政 6（1794））**A**〔左上の写真〕で、「すく遍ん路ミち」の右面に、各所への距離が細かく記されている。

②の金毘羅道標では、状況はかなり異なる。道標の中心は、起点となった丸亀・多度津と金毘羅を結ぶ町石である。純粋な道標としては、松山から延々金毘羅までの里数を示した「こんぴら大門〇里」の里程標（上中央の写真）が特徴的に分布する。

街道 3

四国遍路、金毘羅参詣とも、札所に近づくとも町石が重要な道案内となっていた。遍路の町石は、八十八箇所ある札所から次の札所までの丁数を示したもので、光背付きの地蔵の形態をとる。町石は、すべての札所にあるわけではなく、丁数の順序も正・逆 2 通りある。県下で 10 基以上の町石群をあげると、66 番→67 番（25 基）、67 番→68 番（13 基）、82 番→81 番（逆順、41 基）、83 番→84 番（14 基）、81 番→79 番（逆順、17 基）、88 番→87 番（逆順、45 基）、88 番→入口（逆順、33 基）の 7ヶ所で、正順と逆順が混在している。

金毘羅参詣の町石は、丸亀と金毘羅に丸亀道の起

点石があり、丸亀→金毘羅（6 基）に向かって丁数が減っていく（逆順）。右上の写真は丸亀の起点石だが、目的地・金毘羅までの距離「百五拾丁」が刻まれている。多度津道には、琴平側にしか起点石がなく、途中の町石も残存数は少ない。

農業 1

香川県を代表するもう一つの遺産は、膨大な溜池群である。それらの中核となるのは、空海が修築したことで知られる満濃池（まんのう町、大宝年間（701-04））**A** であるが、度重なる嵩上げで創建時どころか江戸期の面影すら失われている。

香川の溜池の特徴は、皿池の多いことである。すなわち、河川が少ないため、天水を水源とし池の周囲のほとんどを土塁で囲んだ特殊な溜池群が発達した。従って堰堤の長いものが多く、例えば、宝幢寺池（丸亀市、延宝 4（1676）頃）**B**〔下の写真〕は、



撮影：馬場俊介（2012.6.6）

3つの池の複合体から成っていて、堰堤の総延長は2.26キロに達する。

農業 2

2つ目の農業遺産は、小豆島の長崎のしし垣（小豆島町、江戸中～後期、町史跡）**A**〔下の写真〕である。小豆島全体で延べ120キロあると言われる猪垣のシンボリック存在で、風化した白い土塀が海を見下ろす高台に延びているロケーションは素晴らしい。



農業 3

農業の最後は、石栈敷である。小豆島には、池田の栈敷（小豆島町、文化9（1812）以前、国有形民俗）**A**〔下の写真〕を始め、富丘八幡神社の栈敷（土庄町、江戸後期、町有形民俗）**A**、伊喜末八幡宮の栈敷（土庄町、江戸期?）**B**の計3ヶ所が現存する。何れも秋の収穫時に祭の太鼓台や神輿の大練りを見物するために築かれたもので、農業との関連性が強い。同じような栈敷は、全国でも、赤崎神社の楽栈敷（山口）と、表米神社の相撲栈敷（兵庫）にしかなく、前者は家畜の悪病平癒への感謝奉納、後者は神社の神事としての相撲奉納と目的が異なっている。



漁業 1

漁業に関する遺産は全国的にきわめて少ないが、香川には魚の荷揚げ場として使われた仲ノ町の運上場（多度津町、安永年間（1772-80））**A**の石スベリがある他、小規模とはいえ、曾保漁港の南防波堤（三豊市、文化14（1817））**C**や本村漁港の二号防波堤（三豊市、幕末）**C**も残っている。



鉱業 1

香川の特徴は石切場の存在であるが、時代順に見て行くと、まず大串石切場・跡（さぬき市、鎌倉前期、市史跡）**A**が重要である。千葉の房州石と同じ白色凝灰岩の切り出し場だが、時代はより古く京都の『石清水八幡宮文書』（1339）にも記録が残る、寺の五輪塔や宝塔も切り出されたとされる。江戸時代には高松藩の馬の放牧地、明治以降は国有地となったため鎌倉期の状態が保持されている。



鉱業 2

小豆島には日本最大の石切丁場群が残っている。何れも家康時代の大坂城普請に際し石垣用の石材として使われたものである。江戸城の採石場であった



伊豆・小田原の石丁場との根本的な違いは、小豆島では、山麓の転石を使用するのではなく、岩山から直接石材を切り出していた点にある。そのため、伊豆・小田原の採石場が広大な地域に多数点在しているのに対し、小豆島の丁場は狭い範囲に集中している。その中でも最大の丁場が岩谷石切丁場〔天狗岩・八人石・豆腐岩・亀崎・南谷の5丁場に分かれる〕（小豆島町、江戸初期（1620-29）、国史跡）**A**〔一番上の写真〕で、筑前福岡藩主・黒田長政・忠之父子によって採石され、1600 個以上の残石がある。矢穴跡は非常に多く、“○の中に□”の黒田家の刻印（上から2 番目の写真）も数多く確認できる。

小豆島には、石切場で切り出した石材を大坂まで



運ぶための港も複数整備され、小瀬港の一号繫船堤 **A**〔左下の写真〕と元・北浦港の旧南防波堤 **B**（土庄町）が残っている。建設年代は、地元では安土桃山(?)としているが、江戸初期と考える方が妥当であろう。なお、前者は全国最古の現役防波堤である。

防衛 1

香川県には、10 ヶ所以上の台場が造られたと思われるが、識別できる形で残っている台場は1 ヶ所しかない。それが長崎ノ鼻砲台・跡（高松市、文久 3（1863））**B** である。小規模な上、風化が激しく、土塁と石垣が僅かに確認できる程度である。それにもかかわらず敢えて取り上げるのは、屋島の最北端に位置し、瀬戸内海を睥睨するような形で立地する情景が何とも魅力的だからである。



防衛 2

狼煙場については 18 ヶ所造られたとされ、8 ヶ所が程度の差こそあれ現存している。調査の有無にも左右されるが、現在判明する限り全国最多の残存数である。中でも、良好な形で残るのが虎鼻狼煙場・跡（さぬき市、江戸末期、市史跡）**B** である。

